

---

# 俺は断じて認めない！

佐多ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は断じて認めない！

### 【Z-コード】

Z2000R

### 【作者名】

佐多ヒロ

### 【あらすじ】

平凡男子学生の俺、山田。

学期末のテストを境に、平凡が音を立てて崩れる。

つい最近まで引き籠もりがちだった、小川光（仮）にプチストーキングされ、美少女、長沼剛男に懐かれ…。  
ふつ…、返せ、俺の平凡を。

ハートフル学園ラブコメティ、ここに開幕！  
(待て、ラブコメになるのか！？)

ほろりもあるよ！  
(ヤメ口オオオ！)

凡才ですが、なにか？…あ、でも今回ばかりは、赤点みたいですね。

特筆する事もなく、俺は凡人である。

頭は良くもなく悪くもない。

目と鼻、口が付いた顔は、一度見ただけでは記憶に残らない程特徴の無い顔だ。

運動神経だって、この前のスポーツテストは全国平均とぴたり同じ数値だった。

やはり所謂、普通なのである。

そんな俺は、ブレザーに身を包む学生で、日々学舎という箱で、専ら学業に励んでいる。

まあ、間違つても、模範生ではないからそれなり（教師に目を付けられない程度）に、羽田を外しているけれども。

長期休みを間近に控えた今田は、地獄のテスト2田田。

些か面倒だが、仕方ない。気を抜けば、平凡な成績も、ある種非凡になりえるのだから。

時が長い…。

テスト終了時間が、まだまだなのに関わらず、俺の解答用紙は、開始から殆ど変わらず白いまま。クラスと名前の欄と前半の問題が少

し埋めてあるだけ。

ぐつ

たまらず、鉛筆を握る手に力が入った。  
解けない。  
まるで解けない。

ヤマを外した、尚且つ、応用ばかりとなつては、手も足もでない。

俺の前に座る奴の背中を見つめる。  
ああ、もうそれは穴が開くほど。  
本当に開けば、答えが見えるのに。

じーっと、瞼も動かさずに見ていると段々奴の背中が透過してきて、  
答えが…なんて、そんなSFチックなうまい話もあるはずない。

追い込まれた状況で為す術もなく、無情にも終了のチャイムが鳴り  
響いた。

この時は、知る由もなかつた、真っ白に燃え尽きた俺を見て、笑い  
を堪える人物が居たことなど。

# — 平凡完全崩壊 一步手前 … 何この漢字ばかり且つ、不吉なタイトル。

正直、終了のチャイムが鳴つてから記憶があまりない。

教室から校門でこんな遠かつたか？

「よ、山田ーお疲れすやん」

ぽんどころか、肩にずしりとした重みが加わる。突然だつたから余計に重たく感じた。

「どーした？ 汗えない顔が、更に濁みきつてゐるぞ」

一言も二言も多いのは、隣のクラスの富島だ。こいつは凡人の俺とは違ひ、秀才という人種だ。小さい頃から知つてゐる、良く言えば幼なじみ、聞こえが悪いと腐れ縁。

「あー、もう。放つておけ、…」

「あいやりやー、やてはテストしきつたな？」

「…畠つな、聞くな、話題に触れるな」

にやにやと探偵の真似事をする富島が、凄く憎たらしく見える。

その銀縁眼鏡、叩き割つて良いだらうか？

「確かに、今回の数学は応用とか捻り問題が沢山あった」

「とか言つて、お前は普通に解いたんだろうな」

「まあ、うん。それなりに。…休みに学校に缶詰になつて補習は勘弁願いたいし」

嫌味か？嫌味なのか？

そうでなければ、忍耐力調査？俺の沸点がどれくらいか調べるつもりか？

くつ、目頭が熱いぜ…

ふふふ、ははは、そつか富島。そんなに眼鏡を割つて欲しいんだな？

任せろ！

この眼鏡クラシシャー山田（自称）が破片が飛散しない様に、叩き割つてくれよー！

「くす」

背後から忍び笑いが聞こえた。

余裕だな、富島、だがしかし…！

交わせるか？俺のこの渾身の！－

「笑つてろ！次の瞬間にお前の眼鏡は…え？」

拳を固め、勢い良く振り向くも眼鏡クラッシャー（自称）の攻撃は不発に終わった。

行き場を失った拳が、力なく下降する。

「え、と、どちら様？」

俺視線の先には、女の子。

しかも見覚えありまくりの銀縁眼鏡を掛けている。

「山田の知り合いかと思つたけど違うの？校門らへんから一緒にだつたよ。お前が目頭を抑えて肩を揺らしていた時ぐらいに、鮮やかな手捌きで俺の眼鏡を持つてつたけど」

宮島、詳しい状況説明ありがとう。

2人して失礼を承知で、まじまじと女の子を見る。

銀縁眼鏡以外全く見覚えがない。

宮島も俺も、互いに顔を見合させて首を傾げた。

## — 平凡完全決壊。…厄介な奴に好かれた、どうなる俺！—

「ふふ、私、小川光つて言います！」

突然現れた女の子は、前触れもなく名乗り、「はい」と俺の顔に眼鏡をかけた。

「また、明日！眼鏡クラッシャーさん！」

固まつてゐる俺たちを一瞥してから、女の子は手を振りながら走り去つて行つた。

なんだなんだなんだ？

頭が全くついて行かないんだが…

やたら、フレンドリー？

制服を着ていたし、とりあえずは同じ学校だ、よな？ま、まさか、コスプレとかじゅ…い、いや。いくらうちの学校の制服に定評があるからつて、こすپ…つああつ、否定出来ない！

しかしながら、見覚えはないが、女の子が名乗つた名前は、何だか聞き覚えがある気がした。飽くまでも気だが。うん？どこだったか。

思い出しあつて思い出せない感覚が気持ち悪い。曲名も歌詞も出て

来るのに、歌手がわからないみたいな感じだ。

もやもやもやもや

「あの子、山田のクラスじゃないのかな? ほら、【おがわ ひかる】つて、新学期からずっと来てないって言ってなかつた?」

あー、だ、うーだ唸つていたら、我らが富島がほつりと呟いた。

「ああ……」

もやもやが一気に吹き飛ばされた。

そうだ。

ナイス富島!

この際、隣のクラスのお前が、なんでそんな事を知つているかんて気にしない。

「今居るなら、テスト、山田と一緒に受けたつて事だね」

「いや、もつ、自分にっぽいっぽいだつたん! わからぬいッス!」

「…、何キャラだ。しかし。登校拒否つてた女の子が血のりで乗つて、お前何したの?」

「何もしてない。テスト受けただけだしな」

小川が去って、いつもの下校風景に戻る。あー、落ち着く。いきなり現れたから何かと思ったが…、ふう、やつぱりいつも通りが一番いいな。

### 明日テスト最終かー

なんて、お互に呟いて、採点休みの日は、久々に電気屋行くかとか約束をして、家に帰る。それからもやつぱり、いつも通り平凡に、飯食って、風呂入って、テレビ見て、寝た。

翌朝も普通に、携帯アラームを一度止めて寝て、母親に3回起された（最後は背中に蹴りが入る）起きたし。顔を洗つてから、ご飯、味噌汁、田玉焼きを食べて、歯磨きをして、支度を整えるのも、いつも通りだった。

だから、忘れていた。

普段通り過ぎて、忘れていたんだ。昨日のイレギュラーの存在。

その存在を思い出したのは、行つて来ますとお闇のドアを開け、門を出たとき。

「おはよう、山田君ー。」

彼女は昨日と何ら変わらない笑顔を浮かべていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2000r/>

---

俺は断じて認めない！

2011年10月8日19時14分発行